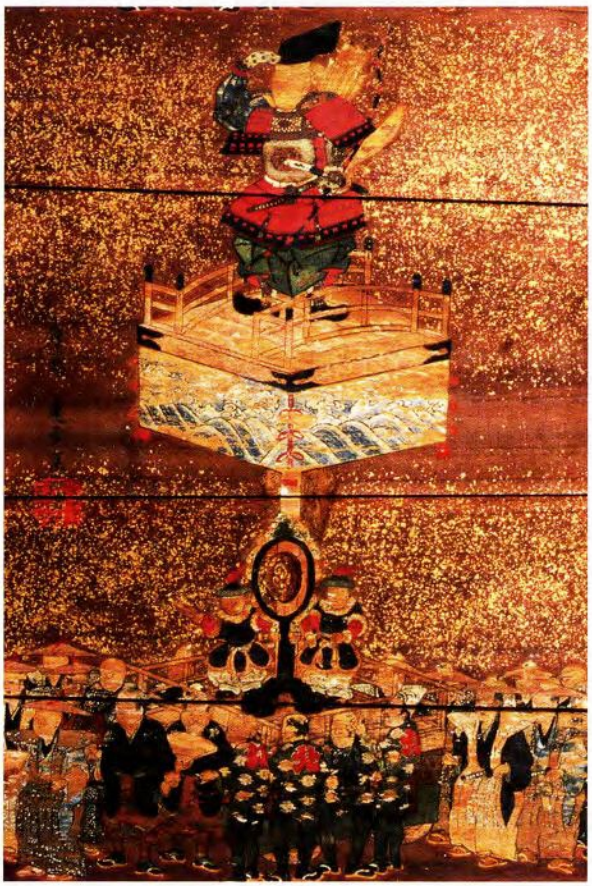
川越市立博物館

博物館だより

第23号

「氷川祭礼絵巻」（ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵）



「川越氷川祭礼絵馬」（氷川神社蔵）

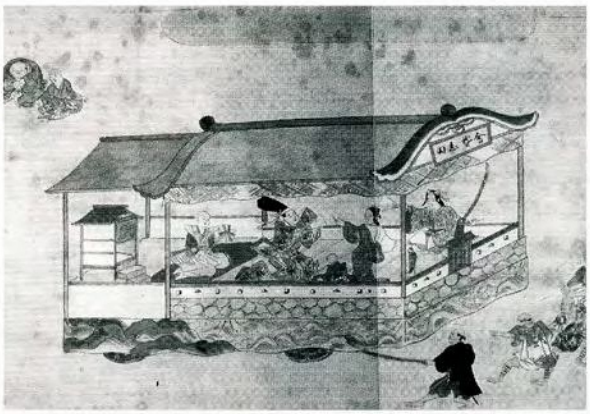
川越氷川祭礼の展開

川越氷川祭礼は、慶安元年（1648）に当時の藩主松平信綱によって始められた由緒ある祭礼です。現在では、天下祭を引き継いだ祭りとして、市をあげてのイベント「川越まつり」として定着し、昨年は55万人の観光客で賑わいました。

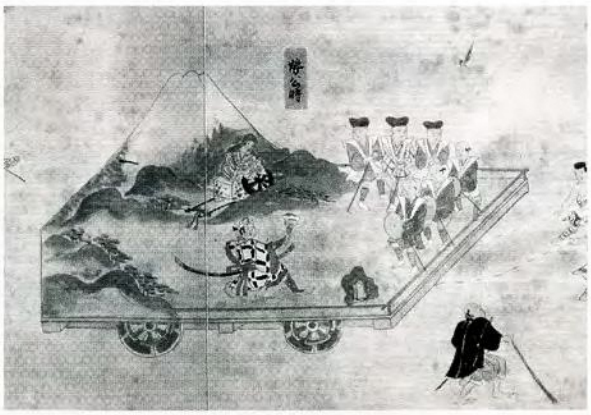
博物館では、第11回企画展として川越氷川祭礼の歴史をたどる「川越氷川祭礼の展開」展を開催しました。平成９年10月４日から11月３日までの26日間の会期で20,790人の方々に御入館いただきました。ありがとうございました。

さて、現在の川越まつりは二重鉾台型の出しの曳行を中心とした祭礼ですが、このような体裁になるまでには長い時間がかかっています。江戸時代の氷川祭礼は、少し行列の内容が異なっていたのです。ここでは喜多町を例にとって江戸時代の氷川祭礼の変遷について考えてみたいと思います。

まず、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵「氷川祭礼絵巻」に描かれている江戸時代中期の喜多町の行列を見てみましょう。絵巻には、



写①　本屋台

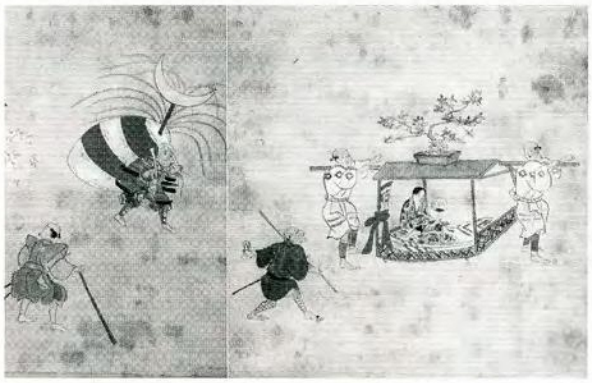


写②　山屋台

先頭の大黒の出しが描かれています。出しは四角形の箱を台にして4人で担ぐという形です。そして、箱には棹を立てて上部には大黒の人形が付くというシンプルなものです。その次に盆栽を載せた花駕籠と飾り立てた母衣武者が続きます。花駕籠は江戸時代中期から一貫して人気のあった出し物で、天下祭でも出されていました。母衣武者は、江戸時代後期には廃れますが、中期には天下祭に限らず関西の都市祭礼でも見られる練り物でした。

屋台は二種類出されています。一つは本屋台と呼ばれる唐破風の屋根に楽屋を後に備えた形態のものです。もう一つは、山屋台と呼ばれ、背景に大きな山を設けています。屋台の上では「会稽志田」と「勢金時」が演じられています。このように喜多町の行列は、当時の氷川祭礼の要素、出し・仮装行列・花駕籠・母衣武者・本屋台・山屋台を含んでいる典型的な行列といえるでしょう。

その後、およそ100年後の氷川神社蔵「川越氷川祭礼絵巻」（文政9年〈1826〉）の喜多町の行列



写③　花駕籠と母衣武者　※写①②③とも「氷川祭礼絵巻」（ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵）

を見てみますと、大きく変化していることがわかります。出しは万度型で4輪の車で曳き、出し人形は俵藤太に変わっています。また、祭礼行列の中心的存在だった本屋台・山屋台が姿を消しています。屋台に変わって「龍神揃い」という浦島太郎を主題にした大規模な練り物が出されています。

龍宮城をテーマにした練り物は天下祭でも人気のある出し物で、寛政年間以前に描かれた龍ヶ崎市歴史民俗資料館蔵「神田明神祭礼絵巻」にも描かれています。

さて、喜多町の祭礼行列に変化が現れたのはいつ頃のことでしょうか。

川越市立図書館には「本屋台山屋台龍神諸道具蔵入覚」という喜多町の文書が収蔵されています。この文書は、文化5·7·11年（1808·1810·1814）の川越氷川祭礼に使用した道具類の保管先の控えです。川越では、使用した祭礼道具類を町内の寺や商家の蔵に分散して保管する習慣があったらしく、鍛冶町（現幸町）や高沢町（現元町2丁目）にも同様の預け覚の文書が残されています。

「本屋台山屋台龍神諸道具蔵入覚」（川越市立図書館蔵）

まず文書の前半は、本屋台と山屋台の記録です。この文書から本屋台・山屋台とも、大きさは9尺×3間（約2.7×5.4m）で、4輪の大型のものであったことがわ

「龍神揃い」の行列の一部　（「川越氷川祭礼絵巻」氷川神社蔵）

かります。この文書にある本屋台・山屋台がニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵「氷川祭礼絵巻」に描かれているものと同じ屋台かといった疑問はありますが、文化５年（1808）を最後に預けの記録がなくなることから、本屋台と山屋台は、文化５年を最後に曳かれることはなかったようです。そして、とうとう文政５年（1822）には本屋台が２両・山屋台が１両という金額で売り払われています。

文書の後半は「龍神揃い」に使われた道具の預け覚ですが、これは文化5·7·11年とも記録があります。ただし、享和元年（1801）成立の「武蔵三芳野名勝図会」にも、どの町内から出されたかの記述はありませんが「龍神揃い」が氷川祭礼に出されていたと書かれていますので、喜多町が文化５年以前からこの練り物を出していた可能性があります。そして、文政９年（1826）・天保15年（1844）の祭礼にも出されていることが「佐久良能仁保比」に収録されている祭礼番附を見てわかります。喜多町の「龍神揃い」は、少なくとも文化５年には出され、江戸時代後期には喜多町の顔ともいえる練り物になっていたようです。

この記録に出てくる出しは一貫して「大黒」の出しです。それ以後、文政９年の「川越氷川祭礼絵巻」や天保15年の「川越氷川祭礼絵馬」には、万度型で４輪の俵藤太の出しが描かれています。出しは、時代が下るにつれて大がかりになっていきます。この頃、他の町内では万度型の出しに葛西囃子と思われる囃子連が乗ることが多くなるのですが、喜多町では唐子２人が楽太鼓を打っています。喜多町が、現在のような二重鉾型の出しを新造したのは、明治30年になってからです。

以上のことを表にまとめて見てみますと、喜多町では行列を構成する出し物として、江戸時代中期は本屋台・山屋台の上での舞踊を中心としていましたが、その後「龍神揃い」を加え、さらに文化５年以後は、「龍神揃い」の練り物を中心とした行列に変えたことがわかります。

喜多町では、舞踊中心から練り物中心の祭礼行列になっていきましたが、他の町内の行列を見てみますと、変化は一様ではありません。例えば練り物を無くし、新たに底抜け屋台を加えて、舞踊を中心の行列に構成した上松江町のような町内もあるのです。

このように、江戸時代の祭礼行列は伝統的な部分を大切にしつつも、町内の人達の嗜好にあわせて、少しずつ変化していったようです。

（学芸係　田中　敦子）

	スペンサー・コレクション蔵「氷川祭礼絵巻」	文化５年（1808）	文化７年（1810）	文化11年（1814）	文政９年（1826）	天保15年（1844）
出し	大黒	大黒	大黒	大黒	俵藤太	俵藤太
本屋台	○	○	×	×	×	×
山屋台	○	○	×	×	×	×
龍神揃い	×	○	○	○	○	○
その他の練り物	花駕籠・母衣武者	不明	不明	不明	蛸と河童の仮装	雪俵の引物・柿の引物

喜多町における祭礼行列の変遷

『近代化と赤煉瓦』Ⅱ

前号において、刻印煉瓦に焦点を絞り、その一端を紹介いたしました。そもそも、この刻印煉瓦を発見するに至ったのは“博物館歴史講座”「近代化と煉瓦―そのルーツを探る―」を新規に開催するにあたっての事前調査においてでした。

この調査を通して、市内で確認できた煉瓦構造物について、今回は紹介してみたいと思います。

○町並みのなかの構造物

川越の町を歩いてみると煉瓦造の塀やアーチ門等が、町並みの良いスパイスとなっていることについては前号で触れました。

なお、この町並みのなかで使われている煉瓦がどこで製造されたものなのか、また、刻印煉瓦の存在等については、残念ながら解明できませんでした。しかし、近隣の小規模な工場で焼かれたものが使われている可能性も多分に考えられます。

○鉄道施設としての構造物

明治政府は、富国強兵、殖産興業政策を推進する一手段として鉄道網の全国普及を図りました。また、鉄道は近代化の「牽引車」としての役割を担い、その建設には大量の煉瓦が使われました。

なお、川越においては東上鉄道（現在の東武東上線）や川越電気鉄道（通称チンチン電車）の遺構に煉瓦を見ることができます。

○水利施設としての構造物

埼玉県は江戸時代から樋門の多いところであり、さらに、近代化の象徴である煉瓦を使ったものが多いことは特異なことのようです。この可能性としては、深谷に日本煉瓦製造㈱があったことで材料が入手しやすく、会社側も煉瓦職人を派遣しやすかったためと考えられます。これと同じ理由から川越にも煉瓦による樋門・樋管等の水利施設が造られたと思われます。

○おわりに

今回、紹介いたしました構造物は、特に文化財に指定されたりしているわけではありません。しかし、最近の近代化遺産やレトロなものへの注目からもわかるように、明治・大正・昭和と急速に近代化が進んだこのころのものには、現在の画一的な大量生産によって生み出されたものでは味わえない深みや温もりがあります。そして、これらが今日の技術革新、産業構造の変革、さらには経済効果の追求により、取り壊しや改変の危機に瀕しているのも、また事実です。

このようなことから、煉瓦構造物についても、活用保存に結び付くような取組みを住民と行政が一体となり進めていく必要があると考えられます。

最後に、冒頭でも触れましたように、今回紹介しました煉瓦構造物の数々は“博物館歴史講座”において刻印煉瓦を発見するという事前調査の中で確認したものです。この講座は、歴史的にみて川越と関連性の考えられる市町村との比較検討により、川越の歴史の再認識を図るのが主目的ですが、いままで触れてきましたように近代化遺産の重要性や保存の意義等についても扱う内容となっており、今年も開催する予定です。どうぞ、この講座に奮って御参加いただけたらと思います。

（教育普及係　大 澤　健）

写真１　川越キリスト教会

写真２　笹原門樋

煉瓦構造物一覧

●町並みのなかの構造物

名　　称	所在地	竣工年	概　　要
旧「菅正（すがしょう）」塀	元町2-2	不　明	織物問屋菅正（菅間正作）の煉瓦塀であるが年代不明。しかし、大正13年頃の南町通りの写真を見ると存在が確認できるので、それ以前からあったと思われる。なお、菅正は白壁造りの店蔵と煉瓦の二階建てがあり、建物は戦後直ぐに取り壊され、塀だけが残った。
境野家　擁壁	元町2-8-14	大正4年頃	境野家は戦後ここに移ってきた。それ以前は（震災後～昭和初め）家政婦の養成所のようなところであった。煉瓦の擁壁は、さらに前からあり、現在の濯紫公園の端から六塚神社脇の駐車場辺りまで続いていたという。
旧小山家　塀 （蔵造り資料館）	幸町7-9	明治26年？	店蔵・添家等が明治26年の上棟とされているが、塀については、いつ頃のものか不明。時期的に煉瓦が一般の市場に出回り始めた頃が26年頃で、このことを考えると同時期か。積み方はフランス積で古い積み方である。
旧小林家 （蔵造り本舗） アーチ門・塀	幸町2-15	明治26年？	建物は明治26年の大火直後に建てられたが、同時に造られたかどうかは不明。なお、アーチ部は、昭和57年に昔の姿に復元したものである。ミスマッチと思える店舗部の蔵造りと煉瓦だが、良い景観を醸しだしている。
山崎家（もち亀） 旧工場部分　壁	仲町4-4	明治26年	元工場として使われていたところの煉瓦壁。店蔵や袖蔵の建った明治26年と同時期に建てられたという。現在は使われていない。
山崎家（茶亀） アーチ門・塀	仲町2-6	震災後？	店蔵、明治38年。袖蔵、明治33年。煉瓦のアーチ門については、震災後ということだがはっきりしたことは分からない。施工は新富町の小林タイル店の先々代の手によるもので、化粧煉瓦が使われている。昔は鉄の扉が入っていたが、戦時中供出で取られたという。煉瓦造の給水タンクや窯もあったという。
伊勢源酒店　袖壁	仲町3-20	不　明	袖壁の詳細については不明。大正13年頃の写真では、存在を確認することができる。
川越キリスト教会 ＜写真1＞	松江町1-4-13	大正10年	設計ウィルソン技師（米）。施工清水組。外壁煉瓦フランス積。明治11年に創設されたが、明治26年の川越大火で焼失。その後、現在地に移転。現在の建物は、大正10年に建てられ、大正12年の震災で被災したが14年には修理。川越では唯一の煉瓦建築物。
高橋ガラス店　塀	六軒町2-8-1	震災以前	店蔵・袖蔵は明治15年に建てられた。先々代まで織物製造仲買商・高橋屋幸助商店として栄えた。しかし、昭和4年繊維不況のため硝子商に転換。塀はイギリス積で、盗難防止・防火のために造り、震災の時にもびくともしなかったという。煉瓦塀で囲まれたところには、離れとして使った建物がある。

●鉄道施設としての構造物

東武東上線橋脚	脇田本町35	大正3年頃	東武東上線（東上鉄道）開通時に設置された橋梁。その開通時の橋脚が残っている。深谷市日煉㈱製刻印煉瓦が使われている可能性あり。
東武東上線赤間川橋脚（上り）	野田町地内	大正3年	開通時に設置された橋脚。全長41.430mの6連プレートガーター橋。ここについても、刻印煉瓦が使われている可能性あり。
東武東上線陸橋 旧橋脚二箇所	小ヶ谷地内	大正3年頃	開通時に設置された陸橋の一連橋脚。現在は使われていない。入間川を挟んで対岸の橋脚で日煉㈱製刻印煉瓦が発見できたことから、ここでも使われている可能性あり。
東武東上線入間川橋梁的場側橋脚	上戸新町37	大正5年頃	東上鉄道の延伸にともなって設置された入間川橋梁の的場側橋脚。日煉㈱製刻印煉瓦を調査時に発見。
川越電気鉄道橋台	古谷上4024地先	明治39年？	川越電気鉄道黒須停留所があった付近にある橋台。規模は非常に小さい。小さな流れを挟んで東西両側にある。イギリス積。年代不明であるが、明治39年の開業時のものか。

●水利施設としての構造物

沼口門樋	古谷上2212-2地先	明治38年	伊佐沼の水を農業用水として取り入れるための水門。擁壁が煉瓦。門そのものは御影石でできている。
笹原門樋 ＜写真2＞	古谷上2958地先	明治34年	旧状をよく保っている。規模は比較的大きい。イギリス積。デンティル積と呼ばれる歯状装飾や塔の存在がディテールの特徴となっている。塔の存在は樋門をシンボリックに見せている。
三軒家樋管	渋井1639-2地先	明治43年	イギリス積の煉瓦造。扉回りは切石でできている。水の出口側に明治43年の銘板あり。規模の大きな翼壁を備えるため、全体的にもスケールの大きなものとなっている。

ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」から

博物館では、毎年１月の下旬から３月の初めの時期を利用して、市内小学校３年生の社会科学習の内容に合わせ、ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」を開催している。

展示の概要としては、昭和30年代に視点をあてた居間と教室の再現展示、今からおよそ100年前くらいの間に使われていた生活用具、勉強道具、そして遊び道具を中心とした資料で構成する。今回は、ここに展示した資料について、紹介したいと思う。

電気洗濯機

川越市立博物館蔵

この洗濯機は、昭和31年に三菱から発売されたものである。小学校３年生の子供たちは、この洗濯機を見て、ドラム缶のような形に驚く。また、上部に取り付けられた搾り機やホースが２つあることなどに興味を示す。

洗濯機は、昭和５年に、東京電気（現東芝）が米国リール社の技術を導入し、初の国産第１号を生産したことに始まる。昭和24年頃に左右に交互に回転する円形の撹拌式洗濯機が発売されるが、価格は５万円以上であり、当時のサラリーマンの月給が３～４千円ということから高嶺の花であった。この三菱の洗濯機も撹拌式であり、２つのホースは、下からの排水用と撹拌している時にあふれる水の排水用として用いられたものである。

洗濯は、まさに重労働であった。洗濯機の発売は、その改善が期待された。しかし、価格の高さと、洗濯は機械がするものではなく、主婦の仕事であるという意識が強く、洗濯は相変わらず洗濯板とたらいであった。

ちなみにこの洗濯板の歴史はそう古くはなく、ハイカラ式西洋洗濯用具だったと知ったら驚くであろうか。開国により開かれた港周辺に外国人居留地が出来上がる。そこで店を始めた外国人の洗濯屋が用いていたのが洗濯板であり、大正中頃には、日本全体に普及していった。

さて、電気洗濯機が普及しだすのは、石鹸製造設備の近代化が始まり、洗濯機用粉石鹸が製造されだした昭和28年頃からである。

昭和36年７月16日付の朝日新聞（夕刊）の広告欄に松下電器の洗濯機の宣伝が掲載されている。この宣伝記事を見ると、正価23,300円で発売されており、当初の半分以下の価格である。また、この年の洗濯機の普及率を経済企画庁「消費者動向予測調査」で見てみると、都市部で55%、農村部で14.5%となっており、洗濯機が庶民の手の届くものとなってきたことがうかがえる。

これ以後の普及は急速で、３年後の昭和39年においては、都市部の普及率が75.8%、農村部で47%となる。（表１）

表１　電気洗濯機の普及率

区　分	昭　和 ３４年	昭　和 ３５年	昭　和 ３６年	昭　和 ３９年
都市部	36.7%	45.4%	55.0%	75.8%
農村部	6.8%	8.7%	14.5%	47.0%

経済企画庁「消費者動向予測調査」より

一般家庭への洗濯機の普及は、主婦の労力と時間に余裕を生みだし、女性の社会進出やテレビの普及にも大きな影響をもたらしていくこととなる。

白黒テレビ

川越市立博物館蔵

この白黒テレビは、三洋電機が昭和35年１月に発売したもので、当時の価格は64,500円であった。部屋の明るさに応じて、画面の明るさやコントラストを自動調整するＡＢＣ装置がついている。また、有線のリモートコントロールが取り付け可能であり、スイッチを入れるとモーターが作動し、チャンネルを回すことが出来た。

昭和26年にシャープが白黒テレビの第１号機を完成。昭和28年にＮＨＫとＮＴＶ（日本テレビ）がテレビ本放送を開始したのを皮切りに、各メーカーから白黒テレビが発売された。しかし、当時14インチの白黒テレビで20万円近くし、一般家庭にはなかなか手の届かないものであった。

日本テレビの生みの親である正力松太郎氏が、東京ならびにその郊外に220台のテレビを設置し、普及に努めた。昭和29年には、その街頭テレビのプロレス中継が人気を集め、多くの人が立ち止まり、見入った。昭和32年頃になると、生産技術の確立とコストの引き下げにより、７万円台の白黒テレビが発売されるようになる。昭和33年に「月光仮面」が放映され、さらに昭和34年の「皇太子ご成婚」の中継をきっかけに、テレビの普及率がのびていく。（表２）

表２　白黒テレビの普及率

区　分	昭　和 ３３年	昭　和 ３４年	昭　和 ３５年	昭　和 ３６年
都市部	15.9%	33.5%	54.5%	71.9%
農村部	2.6%	4.3%	11.4%	28.5%

経済企画庁「消費者動向予測調査」より

昭和36年12月31日の朝日新聞「放送ノート」欄には、「テレビは今年だけで三百万もふえ、年末には一千万台になろう。放送時間も、フジテレビの全日放送（十一月）を中心に、各局とも延長延長にあけくれた」「『お好み映画館』『奥様劇場』『土曜名画劇場』の登場で、ものの考え方どころか、映画好きな奥さんなどは、朝の生活時間変更を余儀なくされた」「ラジオは、今年だけで二百万台も減り、年末には千万台を割りそうだから、名実ともに来年は茶の間の王座をテレビにあけわたすことになる」等と述べられている。白黒テレビの登場は、１日の生活の仕方に大きな変化をもたらしていった。テレビのコマーシャルは私たちの消費生活に、番組は遊びや趣味等に多大な影響を与えるようになった。週刊誌、漫画雑誌等が次々と創刊されたのもこの頃であった。

今回は、ミニ展で展示した「洗濯機」「白黒テレビ」の２つの資料を取り上げ、その時代背景等を紹介した。これらをもとに「洗濯機」「白黒テレビ」という道具が生活の中に入り込んでくると、生活が以前とどんなところがどのように変わったのか、その具体的な体験やそれらにまつわるエピソードをお子さんと語るきっかけとなれば幸いである。

（教育普及係　平岡　健）

平成10年度　事業予定

企　画　展　等

◇第８回収蔵品展　　平成10年７月25日～９月13日

博物館の収蔵資料のうち、雛人形や五月人形など人形関係の資料を展示します。

◆第13回企画展「幕末の川越藩」（仮題）　　平成10年10月３日～11月８日

松平大和守家関連資料を中心に展示し、江戸の海岸防備など、これまで比較的知られていない幕末の川越藩の動向を広く紹介します。

◆第14回企画展「中世びとの祈り」（仮題）　　平成11年３月27日～５月９日

川越周辺に残る仏像や板碑などを展示し、戦乱に明け暮れた中世の人々の信仰のあり方を考えます。

講　座・教　室

●野外博物館教室

市内の史跡・文化財を訪ね歩くことにより、市民の方々に川越の歴史・文化についての理解や親しみを深めていただく場とします。

●古文書講座

初心者の方を対象とし、古文書に関する基礎的な知識の学習や、古文書を通して、川越の歴史・文化を理解していただきます。

●子ども博物館教室

小学校４年生～中学校２年生の皆さんを対象とした教室です。川越の歴史探検・もちつき・機織り等の体験を通して、郷土川越の歴史や文化・伝統について学んでいきます。

●博物館歴史講座

川越と歴史的な共通性や関連性が考えられる他市町村のことを学びます。それにより、川越の歴史に対する理解の再確認を図り、その理解を深めていただきます。

●絵・地図をよむ講座

初心者の方を対象に、絵図・地図の読図方法や歴史的景観の読み取り、現地見学会を通して、景観の変遷について学んでいただきます。

●歴史講演会

県内を中心に活躍されている研究者の方々に、近年の成果に基づいて御講演をいただき、川越の歴史に対する理解を深めていただきます。

●機織り基礎講座（仮題）

初めて織機に触れる方を対象に、布が織られていく仕組みについて、いくつかの道具の操作を通して具体的に理解していただきます。

＊講座・教室の募集は、「広報川越」などで行います。
詳しい内容は、博物館にお問い合わせください。

※全館燻蒸のための休館（予定）…平成10年７月１日～７月10日
博物館館内を消毒するため、休館とさせていただきます。

発行日　平成10年３月31日　　発　行　川越市立博物館
〒350-0053　川越市郭町２丁目30番１号　☎0492-22-5399